07/31 | 08/01

# 食卓のある映画

2015年07月31日[金], 08月01日[土]

展覧会『北大路魯山人の美 和食の天才』にあわせて、「食卓のある映画」をテーマに作品をピックアップ。戦前の東京郊外に住む庶民の食文化が垣間見える『隣りの八重ちゃん』(1934)、戦後高度成長期の“食”が鮮やかな色彩と洗練された構図で浮かび上がる『秋日和』(1960)、そして、核家族化した団地生活の諸問題を食卓という空間に凝縮させた『家族ゲーム』(1983)。「食」という切り口で日本映画の名作を振り返ることで、新しい映画の見方ができるかもしれません。

**07月31日[金] 19:00–20:46**

## 家族ゲーム

106分|35mm|カラー
1983/ATG+にっかつ+ニュー・センチュリー プロデューサー:O
監:森田芳光 原:本間洋平
脚:佐々木志郎、間宮脚、佐々木史朗
撮:前田米造 音:中潟吉巳
出:松田優作、伊丹十三、由紀さおり、宮川一朗太、辻田順一、松金よね子、岡本かおり、戸川純

高校受験を控えた息子のために雇われた家庭教師の風変わりな“指導”によって、現代の家族関係の諸問題が浮き彫りになってゆく異色の「ホームドラマ」。本作を象徴するのは、家族が視線を交わすことのない横一列に並んだ食卓のセットである。家庭教師役・松田優作のアクの強い演技も見どころのひとつ。

家族ゲーム

**08月01日[土] 14:00–16:09**

## 秋日和 [デジタル復元版]

129分|35mm|カラー|英語字幕付
1960/松竹大船|監:小津安二郎 原:里見弦
脚:野田高梧 撮:厚田雄春 美:浜田辰雄 音:斎藤高順
出:原節子、司葉子、岡田茉莉子、佐田啓二、桑野みゆき、三上真一郎、佐分利信、笠智衆、中村伸郎、三宅邦子、沢村貞子、渡辺文雄、桜むつき、北竜二、千之赤子、高橋とよ

父の七回忌を迎えた娘(司葉)は母(原節子)との生活を大切にし、周囲が勧める縁談をあっさり断ってきたが・・・、小津晩年の代表作のひとつで、料亭、バー、ラーメン屋、そして家庭の食卓などを舞台に物語が展開してゆく。2013年に小津の生誕110年・没後50年を記念して新たに作成されたデジタル復元版を上映。

秋日和

**08月01日[土] 16:30–17:46**

## 隣りの八重ちゃん

76分|35mm|白黒|英語字幕付
1934/松竹蒲田|監:溝口健二 原:島津保次郎
脚:柴田昇 撮:鈴木博
出:岩田祐吉、島田敏子、岡田嘉子、清水宏子、高杉早苗、水島秀太郎、葛城文子、大谷方策、磯野秋雄、阿部正三郎

東京郊外に暮らす庶民の日常生活と思春期の男女の心の揺れ動きが鮮やかに描かれる「ホームドラマ」の傑作で、当時の食文化の一端が垣間見える。隣り同士に暮らす新海家の恵太郎と服部家の八重子は実の兄妹のように接しているが、八重子の姉が出戻りで帰ってきて、彼らの関係に微妙な変化が生まれてくる・・・。

隣りの八重ちゃん

10 | 24 25

# ニュース映画を中心に見る 戦時期日本の実像と虚像

2015年10月24日[土], 25日[日]

戦後70年の締めくくりに、戦時期の貴重なニュース映画の数々と、当時の戦争報道と関わりをもつ2本の劇映画を組み合わせたプログラムをお届けする。当初、大手新聞各社の販促活動の一環にすぎなかったニュース映画は、とりわけ1937年の日中戦争勃発とそれに伴う報道の過熱を機に未曾有の活況を呈した。国策に従順でプロパガンダ色も強いことが前提だが、当時の日本人の生活ぶりや世相を浮き彫りにするような細部も見逃せない。

ニュース映画隆盛の時代に、そのサブジャンルとして子どもを対象とするニュース映画も登場。前線での戦闘や戦局報道に重きを置く一般向けとは違い、教育的な色合いも濃厚に銃後を話題にする。村岡花子の穏やかなナレーションが印象的な「聯合コドモのニュース」からは戦時下日本の多様な価値観が読み取れる。

*『聯合コドモのニュース』の上映開始前に企画担当者がプログラムの見どころを解説します。
講師|北小路隆志

**24日[土] 14:00–14:50**

## 聯合コドモのニュース

計31分|16mm|白黒|聯合映画社
第二組『天気晴報の出来るまで』『ワン君とテイちゃん 勤労の友愛』ほか(1938)/第三組『われらの陸軍』『可愛い紙芝居』ほか(1938)/第七組『曾の不思議』『少年警官が生れました 大阪』ほか(1938)

聯合コドモのニュース

**24日[土] 15:10–16:24**

## チョコレートと兵隊

74分|35mm|白黒
1938/東宝東和|監:佐藤武 原:小林勝 脚:石川耿子
撮:吉野馨治 美:吉松英海 音:伊藤昇
出:藤原釜足、澤村貞子、霧立のぼる、浦峰秀子、沙見洋、横山運平、小高まさる

「前線」と「銃後」の強固な連帯を示す話題は、ニュース映画で盛んに取り上げられ、「前線」の兵士らが「銃後」からの慰問袋を喜色満面で受け取る光景がその典型であった。そんな慰問袋をめぐる新聞報道を契機に作られた本作は、その自然で飾り気のない出来ばえをフランク・キャプラが賞賛したエピソードでも広く知られる。

チョコレートと兵隊

**25日[日] 14:00–14:35**

## 朝日世界ニュース

計35分|16mm|白黒|朝日新聞社
No.148『落下傘道に開かず 低空落下試験の犠牲(東京・洲崎)』ほか(1936)/No.193『上海戦線』ほか(1937)/No.227『古今の傑作目も眩に戦争美術展開幕(東京)』ほか(1938)/No.281『無敵陸軍の精華 戦車隊大行進(東京)』ほか(1939)

日中戦争の戦場は、報道各社が激しくしのぎを削る戦いの場でもあり、折しもトーキー化を成し遂げたばかりのニュース映画もそれに参戦する。このプログラムでは、NFC所蔵フィルムの中でも充実したコレクションを誇る「朝日世界ニュース」を例に、一面記事的な扱いの大事件から日常生活の些末な話題までを網羅するニュース映画独特の魅力に迫る。

朝日世界ニュース

**25日[日] 14:50–16:56**

## 西住戦車長伝

126分|35mm|白黒
1940/松竹大船|監:吉村公三郎 原:船橋寛
脚:野田高梧 撮:生方敏夫
美:脇田世相一、浜田辰雄 音:前田調
出:上原謙、佐分利信、桑野通子、近衛敏明、見玉一郎、西村青児、河原崎二

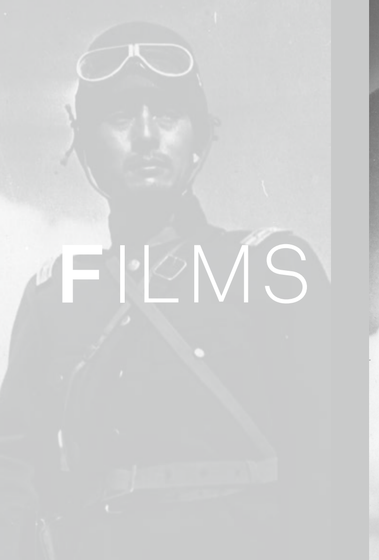
日中戦争における西住小次郎中尉の華々しい活躍を描いた、いわゆる「軍神」ものの一つ。前年の『暖流』で大船調に新風を吹き込んだ吉村公三郎は、一転戦記物に携わることとなったが、これは松竹を退社する島津保次郎に代わって『暖流』を監督するための交換条件だったと自ら述懐している。アメリカ議会図書館からの返還映画。

西住戦車長伝

NFC所蔵作品選集

# MoMAK

2015.08—10



NFC所蔵作品選集

# MoMAK FILMS 2015 08 Aug. 10 Oct.

Information

**上映時間**｜各回14:00–18:00頃（開場は13:30）
7月31日土のみ19:00-上映
上映作品は予告なく変更する場合があります。
上映作品、各回のスケジュールについては京都国立近代美術館HPにて確認ください。
www.momak.go.jp/films/

**料金**｜1プログラム520円（当日券のみ）
*本券でコレクション展もご覧いただけます。

会場　京都国立近代美術館 1階講堂

**先着100席**
入場券は会場入口にて販売します。
当日13:30（7月31日のみ18:00）より当日分のすべての作品の整理番号つき入場券を販売、開場します。各回入替制です。2回目は上映開始の10分前に開場します。会場内での飲食はご遠慮ください。

主催　京都国立近代美術館（MoMAK）
東京国立近代美術館フィルムセンター（NFC）

東京国立近代美術館フィルムセンター
National Film Center
The National Museum of Modern Art, Tokyo

企画協力｜北小路隆志（映画評論家／京都造形芸術大学准教授）
板倉史明（神戸大学大学院准教授）

Exhibition

同時開催中の展覧会

**ポスターにみる ミュージカル映画の世界**
会期｜2015年6月6日［土］— 8月16日［日］

**北大路魯山人の美 和食の天才展**
会期｜2015年6月19日［土］— 8月16日［日］

**栗木達介展**
会期｜2015年8月28日［金］— 9月27日［日］

**琳派イメージ展**
会期｜2015年10月9日［金］— 11月23日［月・祝］

access

**京都国立近代美術館**
〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL　075 761 4111
www.momak.go.jp

JR・近鉄京都駅前（A1のりば）から市バス5番 岩倉行 —
［岡崎公園 美術館・平安神宮前］下車すぐ
JR・近鉄京都駅前（D1のりば）から市バス100番（急行）錦聞寺行 —
［岡崎公園 美術館・平安神宮前］下車すぐ
阪急烏丸駅・河原町駅、京阪三条駅から市バス5番 岩倉行 —
［岡崎公園 美術館・平安神宮前］下車すぐ
阪急烏丸駅・河原町駅、京阪祇園四条駅から市バス46番 平安神宮行 —
［岡崎公園 美術館・平安神宮前］下車すぐ
市バス他系統「東山二条・岡崎公園口」または —
［岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前］下車徒歩約5分
地下鉄東西線「東山」駅下車徒歩約10分 —

## MoMAK F Column

← 007 →

### 食卓のある映画：成瀬巳喜男の『浮雲』

成瀬巳喜男は「女性映画の監督」として知られ、1950年代に製作した林芙美子（1903–51）原作の6つの翻案映画により高い評価を得た。成瀬と林の作品はともに、社会の底辺と周縁を放浪する（多くの場合単身の）女性主人公が、経済的・社会的困難を経験しながらも、イデオロギー、政治／仏教、社会運動に関わることなく、「個人」として快活に生き、働きながら、「内的」葛藤に打ち克つ「庶民」であったと一般的に理解されてきた。

しかし本稿では、成瀬の映画作品における視覚的なメタファーに着目し、社会の下層と辺境を移動する女性の身体と食空間の表象を、政治的・歴史的な介入と交渉の場として考察したい。戦後10年目に製作された『浮雲』（1955）では、社会の底辺と周縁を放浪する単身女性・ゆき子の身体と食空間の表象が、日本近代帝国の伸展と崩壊の物語と記憶を鮮やかに描き出している。

『浮雲』の主人公ゆき子は戦前に静岡の実家を離れ、東京で義兄・伊達の家に居候しながらタイピングスクールに通うが、戦中に農林省のタイピストとして日本軍占領下のフランス領インドシナ（仏印、現ベトナム）に渡り、既婚の官僚・富岡と恋をする。戦後、廃墟と化した米軍占領下の日本に引き揚げ、米兵ジョオの組婦になるが、富岡との関係を続け、中絶による身体の侵害と虚弱に苦しみ、そして戦中への郷愁を覚えながら闇口を凌いでいる。粗末な東京のアパートのちゃぶ台でやかんを手にし、富岡に給仕するゆき子の姿は、フラッシュバックで挿入される、戦中の仏印ダラットの食卓シーンと対照的である。

仏印では明るく広大な森林を背景に、フランス人植民者の屋敷を官舎として接収した日本「皇軍」とともに働くゆき子は、日本では無縁であった官僚たちと会食の席につく。白いテーブルクロスの上に並べられた料理と「白菊菊酒」は、現地のメイドによって給仕される。この食卓のシーンは、「大日本帝国」が西欧帝国（フランス）と同一化し、さらに西欧帝国にとって代わって「大東亜共栄圏」建設の名のもとに「アジア」の支配を果たしていることを具体的かつ直接的に物語っており、ゆき子がその分け前を味わっていることも明確になる。ジョン・ダワーは、世界の多くの国が西欧列強の支配化に置かれたのに対し、日本は西欧を模倣し、同一化を果たしたとし、そのメタファーとして日本人が西洋人と同じbanquet（晩餐会）に参加したと述べているが、ゆき子が参加した会食で経験する身体の豊かさ、力、そして開放感は、フランス帝国にとって代わった日本帝国の臣民の、そして植民者の経験である。ゆき子を論じる場合、日本の中心地である東京と国家／家の制度から外れた単身女性の辺境における「個人的な」経験として解釈されてきた。しかし、ゆき子の「個人的」な経験の政治性は、政府先導のナショナリズムとその産物である「大日本帝国」との関係性のなかで生まれたものであり、そのことが仏印での食卓シーンにおいて鮮明に描写されているといえる。

成瀬作品における女性の身体と食空間の視覚的描写を分析することは、映画作品を歴史的・社会的・政治的な構築と論争の場として読解するひとつの試みであるといえよう[1]。

*1 詳しい論考は、堀口典子「移動する身体—林芙美子原作、成瀬巳喜男の翻案映画をめぐって」、斎藤綾子編『映画と身体／性』日本映画史叢書第6巻、森話社、2006年、221-266頁、Noriko J. Horiguchi, *Women Adrift: The Literature of Japan's Imperial Body*, University of Minnesota Press, 2011を参照されたい。

堀口典子（テネシー大学 准教授）